

松村任三

近代植物学の基礎を築いた学者 高萩市



(高萩市歴史民俗資料館蔵)

安政3年(1856) - 昭和3年(1928)。多賀郡下手綱村〔高萩市〕生まれ。幼名は辰太郎。元服して任蔵、のち任三と改める。明治3年(1870)、松岡藩から貢進生として東京の大学南校〔東京大学〕に入学する。明治10年(1877)、矢田部良吉教授に声をかけられ、東京大学植物園に奉職する。同時に矢田部教授に随行して全国で植物を採集し、その標本は約3千種類に達する。その間、モース(動物学者)の助手として大森貝塚の発掘調査にも随行する。明治18年(1885)にはドイツに留学し、植物分類学を学ぶ。明治30年(1897)には小石川植物園初代園長に任命される。任三が植物につけた学名は数多いが、その代表格が「ソメイヨシノ」や「ワサビ」である。

松村任三は、多賀郡下手綱村〔高萩市〕に松岡藩の家老松村儀夫の長男として生まれました。3歳の頃から両親に漢学<中国の学問>を習い、9歳になると藩の学校である就将館に入学し、中国の歴史を記した『史記』や『三国志』などの難しい本を読み、槍や剣などの武術にも励みました。

(これからは世界のことをよく勉強しなければならない。そのためには英語を学ぶことが大切だ。)

明治3年(1870)、15歳になった任三は英語を学ぼうと決意しました。親に英語の本を買ってもらい、一人で勉強を始めました。このころ、貢進生とよばれる各藩の優秀な生徒1名から3名程度が全国から選ばれ、東京の大学南校〔東京大学〕に集められました。任三は、就将館での成績が優秀であったため、松岡藩の貢進生として選ばれて入学したのです。

明治10年(1877)、任三は、東京大学教授の矢田部良吉に「私の仕事を手伝ってくれないか。」と声をかけられ、助手として働くことになりました。植物の研究をしていた矢田部教授とともに全国各地に植物採集の旅に出ました。採集の旅は約200回ほどになりました。

(研究は苦勞が多いけれども、せっかく矢田部先生が声をかけてくださったのだ、自分のためにも集めた植物についていろいろ研究をしていこう。)

明治16年(1883)にはその研究が認められ、東京大学の助教授となり、今までの研究を『日本植物名彙』などの本にまとめました。

(植物は日本だけでなく、世界中にある。そのためこれからは世界に目を向けていかなければならない。世界の植物の学問を勉強し、植物学



「ソメイヨシノ」の学名のついた札

の発展に努力したい。)

このように考えた任三は、明治18年(1885)にドイツに留学することになり、植物分類学を研究するとともに、ヨーロッパの大学の博物館や植物園を見学しながら研究を深めていきました。ドイツでの研究を終えて日本に帰国したのは明治21年(1888)でした。

(これで研究は終わりということではない。ドイツで勉強してきたことを次に生かしていきたい。そのためには、これからは植物の形態を解明する勉強をしていこう。)

そう考えた任三は、箱根、松島、塩原、江の島、鎌倉、富士山、日光山、天城山、筑波山から沖縄まで、日本全国に植物採集の旅に出ました。より多くの植物を実際に集めてきて、ドイツで学んだことと自分の研究とを合わせて新しい研究に取り組みました。そして茶の葉の解剖図を学会誌にのせるなどして、植物解剖学〔植物形態学〕という新しい学問を作り出しました。その間の明治30年(1897)には東京帝国大学附属小石川植物園の初代園長に任命されました。

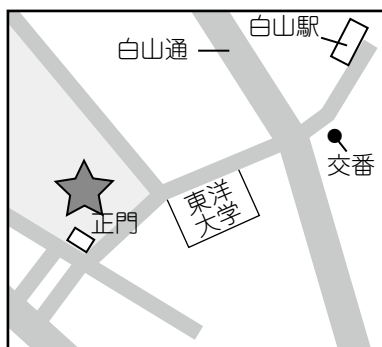
任三は、実に150以上の新植物を発見してその学名をつけたのですが、日本の代表的な桜の一つである「ソメイヨシノ」も、任三が「プルヌス エドエンシス マツムラ」という学名をつけ、全世界に発表したものです。

ゆがりのスポットに行ってみよう

東京大学大学院理学系研究科附属植物園 (小石川植物園)

所在地 東京都文京区白山3-7-1

内容 松村任三が初代園長となった植物園で、日本で最も古い植物園です。



おもな 参考文献

『ソメイヨシノやワサビの名づけ親 松村任三』

(高萩市生涯学習推進本部・協議会 1998)

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)